

「メディア」を問い直す

荒井 英治郎 (信州大学学術研究院総合人間科学系)

1. はじめに

本稿は、2020年度に開講した教職科目(選択)「現代社会と教育問題」(2020年12月22日)の授業にオンラインゲストとしてご参加いただいたゲストティーチャー(坂本建一郎氏:時事通信出版局出版事業部長)の講演内容を再構成したものである。記録作成に当たっては、本学の学生である武田彩実さんに尽力いただいた。記して感謝を申し上げたい。

2. ゲストティーチャーの話

(1) 自己紹介

【ゲスト】おはようございます。時事通信出版局の出版事業部で部長をしております坂本建一郎と申します。今日は、私が一方的にお話をするというよりは、皆さんと一緒に「メディアを問い直す」ことを考えたいと思っています。

私は今、時事通信社の出版部門にいるわけですが、時事通信出版局に入る前は教育系の専門出版社にいて、一貫して書籍や雑誌の編集者として仕事をしてきました。ですから、時事通信グループにいますが、記者の経験はないですし、取材はしますが、いわゆるジャーナリズムの意識を持って厳しく権力に対峙し、社会や世相をにらみながら仕事に取り組んできた、というわけではありません。そこはご容赦いただけましたら

と思います。ただしメディアでもある編集者として、色々思うところがあるので、そういったことも今日は俎上に載せながら皆さんと一緒に考えることができればと思っています。

今日は、大きく3つのパートで構成しました。まず1つ目「メディアを問い直す」。メディアとは何でしょうか、ということからです。それから2つ目は「SNSが隆盛している時代のメディアの形」です。最後に3つ目は、私がこれまで25年以上生業としてきている「編集という仕事は何か」についてです。自分の仕事の棚卸しにつながることもありますが、情報を受け止め、編集し、発信するということについて、皆さんと一緒に考えたいと思っています。

私は1971年生まれで、2人の娘を持つ保護者でもあります。仕事に入ったのは、大学

院修士課程を終えてからです。1997年に教育系出版社に入りました。2004年に時事通信が、ある雑誌の編集長を必要としているということで、良いタイミングだったこともあり、時事通信出版局に移り、2010年まで教員採用試験対策の月刊誌『教員養成セミナー』の編集長を務めました。これは組織的には教育事業部という部の中にある仕事で、その後、出版事業部に移り、仕事の範囲を教育から行政全般や国際情勢等に広がっていきました。出版事業部次長を1年務め、その後、編集委員という職制で教育事業部・出版事業部の両方のお手伝いをするという仕事を2013年から7年間やりました。2020年10月1日から出版事業部の部長をやっております。

(2) メディアを問い直す

【ゲスト】さて、「メディアを問い直す」ということですが、考えたいことの一つ目は「もしこの世の中に『メディア』もしくは『ジャーナリズム』と呼ばれるものがなかったら、一体何が起こるだろうか」ということです。これをぜひ考えてみましょう。

今、実質的にメディアがない国があります。SNSの利用が制限されたり、出版社や新聞社が弾圧されたりする国のことです。メディアが機能していない国にいたら一体何が起きるのだろう。このことを、ちょっと考えてみたいと思います。

例えば、今思い浮かぶのは香港の問題です。周庭さんという学生が、自分の気持ちを持って、街頭に出て、意見を表明したときに、「違法集会を扇動した罪」に問われて、彼女は逮捕されて、それで有罪になってし

まいました。禁固10ヶ月で収監されました。非常に心痛いことです。正直に意思や意見を表明して、街頭に出て行動した結果、逮捕されて牢屋に入れられる国って何だろうと思いませんか。言論の自由や集会の自由がないわけです。私の仕事に関連して言えば、香港では「香港国家安全維持法」という法律ができてから、公立図書館では民主活動家とされた著書の閲覧や貸し出しができなくなりました。

また、日本の外交官は、適切なメディアを持たない国との交渉が非常にやりにくいという話があります。なぜかと言うと、外交官は前にいる相手国の外交官と交渉していくわけですね。向こうの外交官の後ろには相手国の批判勢力、或いは適切に吟味し、批評する勢力がいないと、相手国の外交官はやりたい放題なのです。時間をいわずらに引き延ばしたり、条件を釣り上げたり下げたりします。しかし、日本を含め、メディアが機能している国の外交官は後ろからも見られているわけです。世論が背景にあり、メディアに見られているという感じがありますから、判断を間違えると後ろからも撃たれる可能性がありますね。もちろん、交渉ですから、常に前からも撃たれないように緊張しながら交渉するわけです。そういう板挟みの状態でどうやって職務を全うすることができるのかという悩みを聞いたことがあります。社会や国家がどういう価値観を持っているかということでもあります。

メディアがあるかないかは、色々な論点につながってくると思います。では5分くらいで「メディアを問い直す」の最初の問い、「もしこの世の中にメディアがなかったら」を考えてみましょう。

「メディア」を問い直す

「ブレイクアウト①:メディアがある国、ない国の違い『メリット・デメリット』」

【ゲスト】メディアがあることの意味、「メリットとデメリット」は改めて考えてみると何だろうということでもあるかと思いません。私はメディアがないと困るのではないかという事例を挙げてしまいましたが、メディア自身にも、問題があるかもしれません。

【学生】私たちのグループではメディアがないと大変なことになるという方向で話を進めました。今新型コロナウイルスの影響で外国のニュースが入ってきません。私たちが目にするメディアは目の前のものだけで、全てではないという見方を持たないと、視野が狭くなってしまいます。またその視点を持ちながらニュースやメディアを捉えていかないと、物事の背景が全くないという状況です。そういったことをしっかり考えていきながら、情報は、必要な人に、必要なものを与えるという視点が大切だと思いました。メディアの裏側や物事の背景を考えることは大事だと思います。

【学生】私のグループでは、メディアがある場合とない場合で2つ意見が出ていて、メディアがない場合には世界が狭くなり、時代の流れとか情報が入ってこないで、時代の流れに追いつくことができなくて、生活しにくいのではないかという意見が出ました。また、考え方が一面的になっているのではないかという意見が出ました。

【ゲスト】メディアがないと様々な情報が

入らなくなるので困るということですね。情報がとれないし、考え方も一面的になることがある。では、メディアがあると、どうなりますか。

【学生】メディアがあると情報が入ってくるというのがありますが、逆にデメリットとして、情報が多すぎると取捨選択が大切になり、間違っただけの情報を多く入れる危険性も出て、過激なメディアに染まって、逆に考え方が偏ってしまうのではないかという意見が出ました。

【ゲスト】情報は多いと取捨選択が大切になる。過激なメディアによっては偏る可能性もある。これは、確かに重要な論点です。

【学生】私たちは話し合いにおいて、まずメディアの中でも、SNSに焦点を当てて考えてみました。メディアがあることのメリットとして、色々な言語で、色々な意見とか考え方を拾って、それについて考えることができることが1つありました。それが最大のメリットでもあります。逆にデメリットとして、一人一人の声の価値が下がったという話も出ました。

【ゲスト】それはとても鋭いですね。一人の声の価値が下がる、というのは、それだけで深掘りしたいテーマです。

【学生】私もそれを聞いてハッとしました。一人一人の声の価値が下がったと共に、SNSのユーザーは多いわけで、発信していくときに、やはり言葉遣いは気をつけなければいけないと思っています。文化の違い、

思想の違いによって発言の仕方にも気をつけないと、批判や攻撃の的になってしまうと思います。

【学生】私たちのグループでは、どこまでがメディアとして入っているのかという話になりました。マスメディアから一般が発信する SNS までメディアと捉えて、話し合いを進めました。先ず、ジャーナリズムがなくなったらどうなるか1つずつ話しました。

ジャーナリズムがなくなったら、どれが正しい情報で、どれがフェイクニュースなのかわからなくなる。それによって騙されやすくなる、というのが大きいと思いました。特に、震災時、SNS がきっかけでフェイクニュースがあふれてしまったことがあったので、ジャーナリズムがなくなったらそうになってしまうのではないかと思います。次に、メディア、特にマスメディアがなくなったら、政治を監視する能力がなくなって、暴走してしまったり抑止力がなくなってしまったりして、政治が力を持ちすぎてしまい民主主義が成り立たなくなってしまうのではないのでしょうか。

【ゲスト】どの意見も大切な論点を含んでいますね。情報が一面的になってしまうのではないか、外国の情報が取れなくなるのではないか、考え方が固まってしまうのではないか、それから一人一人の声の価値が下がるのではないか、と挙げていただいた論点は、すごく深いですよ。これは改めてじっくりと考えたいテーマです。

皆さんのお話を伺いながら、触発されたことがたくさんありました。私は今、スマートニュース社のメディア研究所で、メディ

アリテラシー教材制作プロジェクトに入れていただいています。高校の公民科の先生方と一緒にメディアリテラシーの授業案を考えている中で、研究上の視角として「メディア」、「リテラシー」、「情報モラル」の3つをおいたときに、視聴覚教育や放送教育などの「メディア」の研究や、生徒指導の観点からの「情報モラル」の研究の蓄積は日本で結構あるのですが、それと比べて、社会思想や哲学に立脚し、社会や共同体をどうすべきかを考える「リテラシー」からの研究は、意外と深掘りされていないのではないかということでした。このことに関連する事柄を皆さんが見事に今説明してくださっているので、すごいなあと思って、感動してお話を聞いていました。では、共有画面に戻って話を続けたいと思います。

ブレイクアウト①では、メディアについて皆さんが話し合う中で、様々な気づきを得て、そこから意見を出して下さいました。

私の考える「メディアがない社会」とはこのような感じかなというものをお話しします。SF 的な感じですが、メディアがないと究極の「ロコミ社会」が生まれて信頼できる人にしか本音を話せなくなり、情報も何が本当か分からないという事態になるのではと考えています。うかつに自分の考えていることを言葉にすると、それこそ逮捕され、不利な場所に置かれてしまうかもしれないので、表面上は静かな生活になると思います。そこには環境型の同調圧力があるために、人々を分断するディスコミュニケーションがもたらされて、自分の周りに線を引いて、対立を助長するような、そういう究極の「ロコミ社会」みたいなものを考えました。これは、「ディストピア」ですけどね。

「メディア」を問い直す

「ユートピア」ではなく、その逆の「ディストピア」が生まれるのではないかと思います。

(3) メディアとは

【ゲスト】メディアについて、辞書的な定義や研究の蓄積もあるので、皆さんと、ここで確認していきたいと思います。私の仕事は編集者ですが、まさしく私自身がメディアであって、間に立つ者です。著者の方々と本を手にとって読んでくださる方の中で仕事をしています。今日もこういう形で貴重な機会を頂いて、「メディアを問い直す」というテーマを皆さんと一緒に考えるということを見せていただきながら、様々な知見を伝える機能を担っているわけですが、ここで確認したいのは、メディアって間に立つものですよってということです。

『図書館情報学用語辞典(第5版)』では、メディアの項目の3番目にこう書かれてあります。

「(3) マスコミのこと。新聞、テレビなどのいわゆるマスコミが1990年代にメディアと呼ばれるようになり、報道や社会学の領域で定着した。『メディアの時代』『メディアイベント』などの『メディア』はマスコミを指している」

確かにこういう使われ方をしていますよね。メディアといえば一般的にはマスコミのことです。ではマスコミとは何かという問題がここには残りますが、あとでまたSNSと合わせて考えますので、まずは先に進みます。

2019年版の『現代用語の基礎知識』では、メディアをこういう風に説明しています。

「コミュニケーションを『媒(なかだち)』する事物のこと。事物を『媒体(メディア)』、その働きを『媒介(メディーエーション)』とも整理できる。さらに『媒介』は、情報の『伝達』と感情や思想の『共有(交感)』という二つの働きに分けられる」

先ほどもお話ししましたが、私のことと言うと、編集者とは媒(なかだち)だと思っています。事物を媒介、メディーエーションするという風にも整理できます。この定義では、「さらに『媒介』は、情報の『伝達』と感情や思想の『共有(交感)』という二つの働きに分けられる」としていますが、この定義における「感情と思想」っていう観点ですごく面白いなあと思いました。さらに、「共有(交感)」っていうところもすごく興味深いです。つまり伝達と共有に分かれるってことですが、いわゆるエモーショナル(感情的、情緒的)の意味で「エモい」という言葉が今使われることがありますよね。それを使えば、私たちはエモい時代に生きていると言いますか、色々なことを揺さぶられすぎているのではないかとこの定義を見ながら思いました。

プログレッシブ英和中辞典でメディアを調べると、「mediumの複数形」って書いてありました。ではmediumって何かと調べてみると、こう書いてありました。「(間を)つなぐもの。伝達などの媒体、媒介物、手段：芸術などの手法、技法」。ここでも、興味深いのは、複数形(s)になると、霊媒とか巫女という意味があることですね。そう

かメディアは霊媒なのかって思いました。そこから触発されるものが色々ありますね。

ブレイクアウトの2つ目に入りたいと思いますが、今の話の続きで、辞書的な定義を踏まえて、是非SNS時代のメディア、世論、世相の特徴について皆さんで話し合ってみてください。皆さんが先ほどの「ブレイクアウトセッション①」で話し合ってた通り、メディアは実に多様ですよ。その上で、情報の発信主体は、昔は新聞、ラジオ、テレビ、雑誌などが大きい位置を占めていたわけですが、今は、私たち自身がSNSの時代で、いわゆる「マスコミ」とは異なる情報経路で情報を取っていますよね。先ほど、外国からの情報という論点も出てきましたが、SNSでは、外国の人たちと繋がっていることは普通にあります。

これは、しばらく前のことですが、中東での民主化運動「アラブの春」の始まりは、アフリカ北部のチュニジアで起きた事件でした。野菜売りの青年が抗議の焼身自殺を遂げたことをきっかけに始まったデモなどの様子がSNSで拡散して、長期独裁政権だった当時のベンアリ政権が2011年1月に反政府デモで倒れました。「シャスミン革命」と言われています。政治運動まで広がったことにSNSが大きな力を持ったのです。動画発信で、国が倒れるようなことすら起きるような時代になっている。SNSについても入れていきながら、「メディアを問い直す」ことを、私たちは考える必要があると思います。ここからまたお互いの考えていることや感想を伝え合いながら話し合っていたらと思います。

「ブレイクアウト②: SNS時代のメディア、世論、世相の『特徴』は」

それでは、SNS時代のメディア、世論、世相の特徴について、どういう話し合いがあったのかを是非、教えて頂きたいと思います。

【学生】私たちは、主にSNS時代のメディアというテーマで、発言していきました。まず、先ほど言葉の定義を踏まえると、SNS時代の1個前のメディアとは、比較的多くの人たちが思っていることや、世の中の出来事を抽出して、それを編集して出していたと思います。しかし今のSNS時代のメディアは、先ほどの定義から分かるように、とにかく情報の媒介となるものをメディアと捉えるのなら、SNSもメディアに入ると思うのですが、そう考えると、今のSNS時代のメディアは自由で、一見すごく理想的な形のメディアだと捉えることもできますが、ただ逆に自由だと、抽出や編集、それこそジャーナリズムが入らないので、無法地帯になってしまうという問題もあると思います。

またフェイクニュースのような問題も出てきます。かといって、今のSNSは良くないのかっていうと、出た意見として、少数の人がSNSを使っていた時代は、まだフェイクニュースとかの影響は少なかったのではないかと思います。

コンピューターやインターネットが普及し始め、少数の人しかインターネットを使っていなかった時代は、URLで検索をかける時代があったということを知りました。URLで検索をかけられるということは、ある程度知識があることだそうです。そうな

ると、フェイクニュースであればフェイクだと気づくことができますし、使う人が高度な能力を持っていたということだと思います。少数の人が SNS を使っていた頃は、まだそういう負の面は出ていませんでしたが、今は誰でも自由に使えるようになってしまったので、負の面が出てきてしまっているのだと思います。今後対策する上では、情報を発信する力というよりは、情報を得る力（何が良い情報で何が悪い情報なのか）や選別する力をつけるべきではないでしょうか。

最後に出てきたのが、テレビとかでも SNS で話題という感じでテーマが取り上げられますが、それはいいことなのか？ということ。この意見を出してくれた方は、SNS で話題として取り上げることはいいことで、SNS というジャーナリズムがないところで話題になっている情報を、テレビで取り上げることによって、ジャーナリズムや編集といったジャーナリズムを介してその情報が出るので、SNS の段階では足りなかったジャーナリズムが補完されて、正しい情報になると思います。

ただ、今の状態だと、むしろ SNS で話題であると取り上げるだけで、ジャーナリズムを気にせずテレビに出してしまい、ただ焚きつけているだけに見えることもあります。ただ、SNS 時代において、テレビの役割をもっとテレビ自体が分かっていないといけないのかなと思いました。

【ゲスト】ありがとうございます。観察、分析だけではなく解決策まで出させていただきました。情報を得る力や選別する力がとても大切だということや、既存のメディアと

SNS が拮抗関係にあるという話でとても面白いです。ありがとうございました。

実は、今お話を伺いながらこれも思い出していたのですが、時事通信出版局で最近、日めくりカレンダー「まいにち飯尾さん」というお笑い芸人の飯尾和樹さんの日めくりカレンダーを制作しました。これをプロモーションするために、飯尾さんが出演しているテレビ番組の制作の人に連絡をして、番組内でぜひ紹介してくれませんかとお願ひしたのです。

それにより情報系の番組を作っている方々は、明日や明後日のことしか考えていないということを知りました。スピード感をもって情報番組は作られているのです。よく情報番組のコメンテーターの人が、意見が浅いと批判され、情報番組の質はこれでよいのか、と言われるのですが、私は明後日のことしか考えてないようなスパンで動いている人たちには、おそらく1か月先のことは見えていないのだと思います。本当はその時間軸をきちんと入れていかななくてはいけないのですが、明日のことばかり気にして、長いスパンの先のことって考えられてないのではないかと思います。

ただし、私の生業である本は1番スローなメディアなので、時間をかけて、しっかりとした内容に仕上げていきます。本は売れないと言われる中で、こういう時代だからこそ、スローなメディアである私たちは自信を持っていいのかなと思っています。

【学生】学生の多くは LINE と Twitter しか使ってなくて、Facebook はあまりやっていないです。

【ゲスト】Facebookは私も使っていますが、どちらかといえば「おじさんメディア」ですよ。

【学生】私は中国のSNSやFacebookは情報を全部とられていて、ビッグデータとしてとられている恐怖を感じています。実名性のデメリットもあります。しかしメリットを感じているのでやめられないです。

【学生】LINEは携帯電話の番号と結びついているので安心だと思います。Twitterは、自分なりの主張を出すメディアであり、自分の考えの方向に誘導していると感じているので、事実を伝えているのは3割もないのではないのでしょうか。

【ゲスト】ありがとうございました。1点だけ、今の話から触発されて申し上げますと、ビッグデータの扱いは今後課題になると思います。良い使い方悪い使い方できます。個人の生活に幸せをもたらすのか、あるいは窮屈さをもたらすのか分かりません。これは国の安全保障の問題にも関わっていて、個人が特定されそうな、固有名詞でデータの検索に引っかかってしまうようなものは、周到に外されていることがあります。

さて、ブレイクアウトセッションで2つ目のテーマ、SNS時代にフォーカスしてきました。ここで、「ジャーナリズムとは何か」という、その機能も念のため確認しておきましょう。

『日本大百科全書(ニッポニカ)』の定義によれば、「マス・メディアが時事的な事実や問題に関する報道・論評を伝達する活動

の総称。そのような活動を行うマス・メディア自身をさすことばとして使われることもある。発生史的には印刷定期行物、なかでも日刊新聞がジャーナリズムの中核メディアである。語源的にもジャーナリズムはラテン語で『日々の』を意味する *diurnus* に発しており、ジャーナリズムということばが日常的に使われるようになったのも、日刊紙が新聞のパターンとして一般化した19世紀初頭以降の欧米である。しかし、他方で雑誌も普及し、20世紀には映画、ラジオ、テレビが登場するなど多メディア化が進展するに及んで、ジャーナリズムも、表現の手段も多様化した。しかし、ジャーナリズムの中心的機能は『時事的な事実や問題に関する報道・論評』の伝達にある。そして、このような報道機能には真実性と客観性、また論評機能には批判性という規範性が伴っている。このような意味で、ジャーナリズムの概念は、規範的概念としての性格が強い。したがって、大衆に対する情報一般の社会的伝達現象の統一的指示概念であるマス・コミュニケーション、ないしそこにおける伝達媒体たるマス・メディア一般とジャーナリズムとの間には、重なる部分があると同時に、おのずから違いがある。また、各メディア特性に応じて、メディア相互間のジャーナリズム性、さらには同一メディアの行っている諸活動相互間のジャーナリズム性にも、線を引くのは容易でないが濃淡の違いがある。その意味で今日のジャーナリズムは、もっとも狭くいえば、日刊新聞の報道・論評活動を核にしてラジオ・テレビの報道番組、時事雑誌、それにニュース映画をつなぐ一定範囲のマス・メディアの活動とその特質と考えてよいだろう」

こういう定義を社会学者の内川芳美（東京大学新聞研究所教授・所長、成蹊大学教授等を歴任）先生が書いていました。

皆さんがここまで話し合ってきた、SNSを含めてメディアとは何かについて考えてきた中で、メディアの良い面と悪い面の両面をしっかりと捉えておられましたね。これがジャーナリズムに関わってくるところで、担うべき機能なのだろうと思います。皆さんがもしSNSを使う中で、情報発信をする際、世の中に流れている情報を受け止めて発信する主体として、皆さんの中の「ジャーナリズム的なもの」は一体どこにあるのだろうかとぜひ考えてもらいたいと思います。

（４）編集とは

【ゲスト】最後に「編集という仕事は何か」について考えていこうと思います。これは私が今実際に担っている職のことであり、私は日々どういう気持ちで編集の仕事をしているかということも、考えをお伝えしながら皆さんと一緒に考えたいと思います。私の仕事は「情報を受け止め、選択し、加工することだ」と思っています。このことに自覚的です。また、この文章については、どう判断したのかということについても、聞かれれば説明できると思います。そこでは情報の取り方とか使い方、受け止められ方をとても気にしています。

ここで「フィルターバブル（見たいものだけみえる）」の説明を入れたいと思います。SNS時代の私たちの環境をめぐる特徴の一つは、私たちは、見たいものだけが見えるように、アルゴリズムが誘導しているという

ことです。先ほどビッグデータ時代の窮屈さの可能性を話しましたが、アルゴリズムはとても巧妙にできています。私は自分のスマホとかで推薦されるニュースを見ると、びっくりするほどシンクロニシティがあると感じる場合があります。過去に自分が買ったものとかだけではなくて、検索した言葉などから類推して統計的に出していると思いますが、技術的なレベルで「フィルターバブル」が実現されています。

それから「エコーチェンバー（反響室内で増幅される声）」についてです。Facebookなどはまさにそうですが、似たような人たちと一緒に場所にいると、ずっと同じ質の声しか響いてこないのです。その中で気を付けなければいけないのは、私たちの外側にあるものが見えていない可能性です。それと同時に、SNS時代というのはローカルルールが簡単に破られる時代ですから、旧態依然としたローカルルールはSNSを通じて外側に拡散し、外側の論理で「それだめだよ」って異議申し立てが突然来るのです。そのことに自覚的であるべきですし、私たちの置かれている技術的な環境を俯瞰して見ないといけませんよね。

そう考えると紙の新聞では、自分が求めている情報まで含めて色々とバランス良く出してくれていて、ネットニュースなどよりも優位性があるのではないかと思いますが、あれだけのアルゴリズムを作れるニュースアプリがありますから、商業主義的に走りすぎなければ、そのあたりのバランスをきちんと取れる技術的な乗り越えもできるとは思います。

今日の到達点として考えていたのは、メディアとは何かという哲学的な問いと、

SNSも含めてメディアの社会学的な分析です。それを踏まえておそらく皆さんの中にはこれから学校の先生として活躍される方々も非常に多いと思うので、メディアの現在を問い直した上で、教育学の理論と実践に結び付けていくことができたらと思います。

私たちもまた、皆メディアではないかというのが私のさしあたっての結論です。

(5) 質疑応答

【学生】坂本さんは、なぜ、その道を志したのですか。

【ゲスト】私はもともと学校の先生になりたかったのですよ。ですから教師を目指す皆さんがとても羨ましいです。ただ私が教員採用試験を受けた1990年代中盤は、東京の教員採用試験は1000人以上受検して、受かったのは2人でした(中高社会)。倍率500倍以上です。流れ流れて私は編集の仕事に就きました。その大学院修士課程で修士論文の指導教官が、「坂本君は編集に向いているよ」って言ってくれたのです。背中をそっと押してくれました。私の師匠は歴史社会学や職業社会学とかをずっとやっていて、職業の専門家が言うなら間違いないなと思ってですね。それで編集の道に入りました。

【学生】編集の仕事にはどのような魅力がありますか。

【ゲスト】人に会って「それは何で？」と聞いていることが楽しいです。で、本物の人は芯にぶれないコンテンツを持っているので

すよ。どんな変化球の質問をしても、直球の質問をしても答えがぶれません。そういう本物の人に色々話を聞くことは本当に面白いです。自分の知らない価値観も経験も持っていますし、そのこと自体が単純に面白いです。私は「情報は人にしかない」と思っています。面白い人をたくさん見つけて人に会って人に話を聞くことが一番の情報です。

【学生】「情報が人にある」という言葉がすごく響いて、自分も色々な人に会って色々なことを吸収していききたいなと感じました。ブレイクアウトの中で、SNSは自由・自由じゃないという話をしていた際、『自由だけ無法地帯』という意見が出たのですが、自分たちのグループでは『自由なようで自由じゃない』という方向で話していました。取捨選択をしながら使っているが、SNSが常識になってしまっている、SNSをやっていないことが蔑まれる原因になることがあるという意見を聞いて、シェアしたいと思いました。また、Twitterは情報を早く得られるなど非常時に便利ですが、使っていないとわからない側面がメディアには多いこと、高校生たちにも良さを伝えなければいけないということを教育的観点から考えると、メディアに向かっている時間が大人と高校生は全然違うから、そこをどうやっていけるのか、ということが「問い」としてあります。

【ゲスト】SNS利用については、「メディア」、「リテラシー」、「モラル」の3点で見たときに、「リテラシー」が弱いよねという話を先ほどしました。私たちが取捨判断するた

めの判断基準みたいなところですよ。どう考えるかの基盤みたいところが、私たちは弱いかもしれないと正直思っています。それから、本って素晴らしいと思っています。先程メディアの説明の際に辞書を引きながら、色々な定義を使いましたが自分で考えて書こうと思ったらこれは大変なこと。しかし先人が色々なことを考えて磨き上げた言葉や考えを残してくれています。こういうのはすごくコストパフォーマンスがいいと思います。ですからもっと本から情報を得るといふか、色々考え方のきっかけを得るのはいいことだと思います。

【学生】新聞各社をみていると、同じ記事でも書き方が違って、右や左という言い方もありますが、新聞社自体の書き方の特徴がどこで生じてくるのかというのと、専門・企業として、そういう違いがあることはいいことなのか悪いことなのかをお聞きしたいです。

【ゲスト】まず、1つ目です。新聞の論調は基本社説で判断できると思うのですが、社説は、新聞社の論説委員とか編集委員が検討しています。NHKで言うと論説委員室ですかね。そういう人達が、真剣に考えています。その歴史とか経緯があって、A新聞、B新聞、C新聞、D新聞ってそれぞれの論調が出てきます。ですから、1つのテーマについて書いている社説、それを対比して見ると、その会社の考え方が見えてくるといいますね。それについて皆さんがどういう風を感じるかという、1つの考える手立てにはなりますよね。その上で、考え方の多面性を全体で担保しているという感じはある

かなと思います。

一方で、トランプ大統領誕生の時の4年前のことを未だによく思い出しますが、私はあの日の朝10時までは、ヒラリー・クリントンが大統領になると思って本を準備していました。それがそういうことにならなくて、慌てて1か月ぐらいで内容を全部作り直して、トランプ大統領の本に仕立て直したことがありました。あの時の反省を踏まえると、メディア総崩れでしたね。総崩れの危険性もあり得ると僕は思っています。

2つ目に、新聞各社の論調の違いは必要だと思います。元朝日新聞編集委員で、今スマートニュースメディア研究所研究主幹の山脇岳志さんの本に、昔のアメリカの場合はメディアが法律自体で、両方に配慮すべきであるということ制度上ちゃんと決めていたことがあったと書かれていました。それはなぜかと言うと、健全な世論を作るために単一の軸ではなく別の軸を持ってきて、やっぱり多面性で考えることが必要だと思われていたからです。

今は何が起きているかと言うと、両論を踏まえて考えるのではなく、お互いに自分の陣地に立って外側を攻撃するっていうか、自他の間に線を引いています。私は少し時代が戻ってしまっているのではないかと思います。

分断された小さなコミュニティの気心しれた人だけで過ごせば楽かもしれませんが、外側に対して開かれてない可能性はありますよね。これが自分達だけの問題だったらいいのですが、私たちは社会の中で暮らしているため対立せざるを得ないような利害問題が多く出てきます。このままだと、私たちは痛みを分かち合うような時代に入

ってくるのかもしれない。自分だけ気持ちよくて、相手の痛みに気をつけられないような世界では、どうやって物事を最適化していくかって難しいと思います。

【学生】マス・メディア、新聞社、テレビは中立的な立場で報道することが第1だと思っているのですが、実際見ていると、色が出てきていたり偏っていたりすると感じることもあります。編集者は、中立的でいようと思っっているのでしょうか。

【ゲスト】中立的でいようと思っっていると。しかし、自信を持って中立だって言っている人の中には、客観的に見て偏っている人がいるかもしれません。そこについては、対話が必要です。何か外側にルールや正解があつて、そこにみんなが向かっていくのではないと思っっています。先程の「情報は人にある」ということに関係するかもしれませんが、みんなそれぞれの思いや考え、感性があつて、もし違和感を抱くのであれば、そこから対話が始まりますよね。それが重要なのではないかと思っっています。1番最初の質問に戻ると、明らかにフェイクで、事実に立脚しないこと言ったらそれは問題だけど、ちゃんと事実をしっかり押さえながら主張をしているのだと思っます。

【学生】その人たちの周りでフィルターバブルやエコーチェンバーが、社内の人だけと交流するのだったら社内と社外でフィルターや線引きっていうものがあつて、社内の情報だけ集まるから、そっち側に偏ってしまうみたいなことですか。

【ゲスト】そういうことだと思っます。そういうことってたくさんあると思っます。

【学生】ある番組で、SNSによる誹謗中傷で命を絶ってしまった方がいますが、私たちは今、欲しくない情報も勝手に入ってくると感じています。それを少しでも自覚してはしながら、そのメディア(SNS)の誘惑やメリットに耐えられないのだと思っています。使うこと自体が悪いとは思っませんが、どう考えられますか。

【ゲスト】私は枠組みとしての使われ方の範囲の確定と、それを踏まえた個人の使い方両面からの調整が必要だと思っています。不具合を感じている個人がいるのであれば、その人はやめるべきです。SNSに自分の気持ちがやられすぎているなど思ったら、なんとか見ないようにすることが一番いいと思っます。これはある種の依存症の話に近いと思っます。人はやりたいことと、やらなければいけないことを天秤に掛けながら、まずいつて判断します。その上で、ある一定の量を超えたら社会的に規制あるいは調整をする必要も本当は出てくるのでしよう。

どうやって付き合うか、どう生きるかは、その人個人の気持ちとか考え方の問題ですから、正解はありません。もっと言えば、そんな世間に合わせる必要は全くないのです。

最後に、皆さんも頑張って下さい。そして自分を信じ切ってください。2020年12月は中学校や高校の生徒さんと色々お話する機会をいただいているのですが、「自分の好きを手放すな」とよく話します。自分の好き

「メディア」を問い直す

なもの、その感覚を絶対に手放してはいけません。自分のことをよく知り、自分が大切に思うこととか自分の感情に正直になることは大切だと思うのです。それを手放してはいけないと思います。大変な時代ですけど、頑張ってください。